

えぽっく

第2巻2号通刊11号
2001年2月9日発行
中央区八重洲2-1
八重洲地下街
TEL033272-2888

八重洲古書館
RETRO REVALUE RECYCLE

21世紀のほんや、

日頃、当店をご利用いただきまして誠にありがとうございます。予定では、新しい店舗がオープンしている時期なのですが、準備中に、もう一段ステップアップしようということになり、開店が遅れております。新店舗を心待ちにされていらっしゃる皆さまに、心よりお詫び申し上げます。

私どもの店舗は、八重洲地下街にあるのですが、東京駅前と言うことで、マスコミ関係の皆さまにも注目されているようで、お問い合わせも沢山頂戴しております。

主なテーマは三つです。インターネットのこと 大型中古書店のこと 本の整理処分のこと、です。

インターネットについては、当社も早くから取り組み、情報発信のみでなく、ご来店のお客様が自由にご利用いただけるコーナーを設けたり、お客様の探求書探しに活用しております。私どもの営業活動、サービスに大変重要なツールでございます。

大型中古書店は、東京駅近辺にはございませんが、皆さまお住まいのご近所にはキットあることと思います。チェーン店によるパワーを持ってサイクル本を手にとるお客様が増えてまいります。奥行きを取り扱う当店にとって、新しいお客様がお立ち寄りいただけるようになる今後が楽しみです。売るにしても、買うにしても、評価の仕方が違いますので、どちらが得かはおお客様ご自身でご判断いただき、ご利用いただきたいと思ひます。

本の整理処分については、お持ちになっている本により、一概にご説明できませんので、ご遠慮なくご相談下さい。

書物は色々なものを与えてくれます。是非、多くの書物に接して戴きたいと思ひます。私どもの店舗をサロンとして、ゆっくりとご利用下さい。今後とも宜しく願ひします。

八重洲古書館店長 渡辺明子
金井書店八重洲店店長 川上亜衣子



スタッフのメッセージ

こんにちは。寒い日が続きますね。寒さが人一倍苦手な私には本当に辛い季節です。暦の上では立春を迎えたといっても、まだまだ北風がビュービュー吹きすさんで、その音を聞いただけで出かけるのに尻込みしてしまいます。だからこの時季、お休みの日は家にいることが多いんです。

こんな私ですが、先日東京が3年ぶりの大雪の日仕事がお休みでホッとしたものの、目が覚めると一面の銀世界。なんかワクワクしてきて思わず庭に出て、愛犬と大はしゃぎしてしまいました。もちろん上から下まで完全防寒。あまり人には見せられない姿でした。数少ない冬のいいところは食べ物が美味しいことです。特に鍋はいい！友達や家族といっしょにワイワイ食べる鍋は最高！

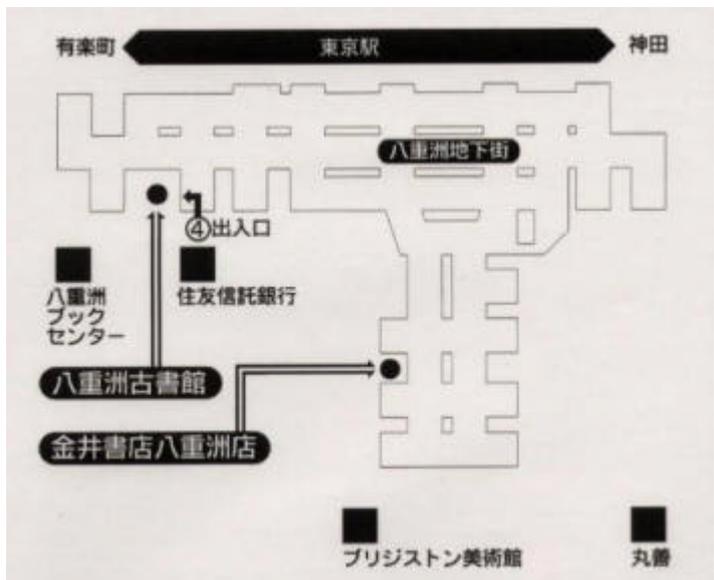
でも何をしてても寒いものは寒い。やっぱり春が待ち遠しいです。周りを見れば、梅の花がぼつぼつ咲き始めたり、春物の洋服が店頭と並んだり確実に春は近づいているようです。私も今から梅や桜を見に行く計画をたてたり、大好きなお寺や仏像を観に行くことを想像してうずうずしています。

でも本当は私の一番好きな季節は”夏”なので、冬から春を通り越して夏にならないかなあと思っています。理由はもちろん”ビールが美味しいから”

金井書店八重洲店 竹内良枝

古日本屋の

宣伝力は素晴らしいので、リしたことのない方になり、古本業界いくということにの深い古書の世界



最新情報はインターネットホームページをご覧ください。
<http://www.kosho.co.jp/>

趣味の文化展

印象派絵画を訪ねて

西洋美術の中で、“最も良く知られている”といえば、やはり「ピカソ」でしょうか。絵画にはまったく興味が無いという人でも、一度は見たり聞いたりしたことのある画家であり、作品の難解さや親しみ辛さとは裏腹に、抜群の知名度を誇っています。それでは、“日本でもっとも広く愛されている”西洋美術は、どうでしょうか。これは好みにもより、一概に断定はできませんが、性別や年齢を問わず人気があるのは、「ルノアール」ようです。「印象派」といわれる、一時代を築いた絵画の代表的な画家であるルノアールは、その柔らかな線と明るい色彩、また、身近な題材が、親しみやすさを感じさせるのかもしれませんが。また、ルノアールに限らず、「印象派」を代表する画家は、全般的に人気がある様で、

日本で最も多く展覧会が開催されているのが印象派である、と以前聞いたこともあります。

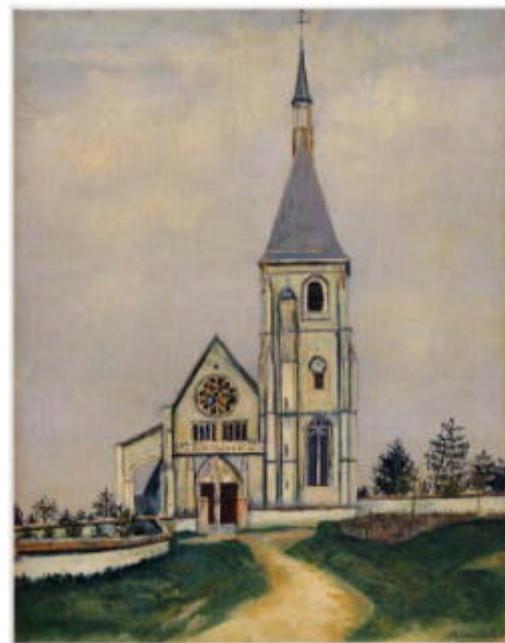
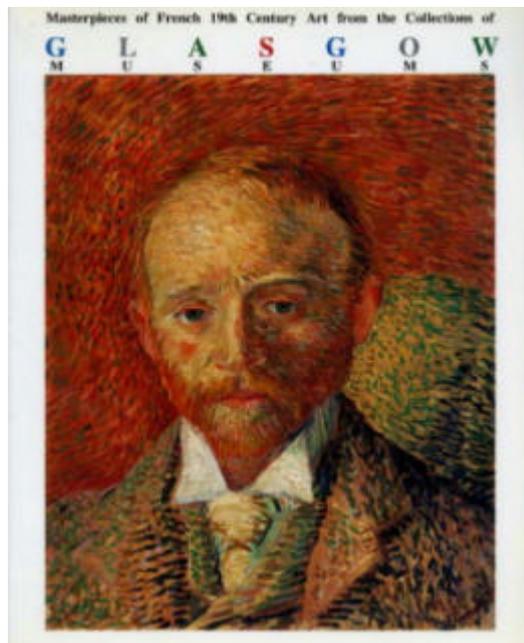
そこで、この「印象派」を中心に、その時代の絵画全般をとらえたものになりたいと考え、今までとは違った、二部構成での展開をしていこうと思います。第一部になる今回は、主流である「印象派」を、をメインテーマとした展示を、第二部の次回は、印象派の前後の美術の流れをとらえて、『新古典主義』・『バルビゾン派』・『後期印象派』などをとりあげてゆく予定です。

< 当時の時代背景 >

印象派の登場する19世紀の中頃から、フランス社会は、激動の時代に入ります。相次ぐ政権の交替や戦争など、政治において、また市民にとっては生活そのものが非常に不安定な時代でした。ナポレオン3世による、第二帝政期は、1870年のプロセイン・フランス間の戦争で崩壊し、ドイツ軍によるパリの包囲に、市民は動揺します。その後、パリでは、

市民による共和主義革命がおこり、パリ コミュンが結成されますが、中央政府の徹底的な弾圧により、パリでの市街戦へと発展し、「血の一週間」と呼ばれる最悪の局面を迎え、パリ コミュンは、わずか2ヶ月で崩壊してしまいます。わずか1年の間に起こった、こうした動きは、1871年8月の第三共和制の成立によって、なんとか収束へと向

かい、かろうじて安定とも呼べる生活が、戻ってきたかにも見ましたが、その後も、いちじるしい景気の暴落や、第一次世界大戦などがおこり、結局は落ち着かない時代が長く続くこととなりました。一方、この時代は、様々な技術が飛躍的に進歩した時代でもありました。1855年のパリ万博をきっかけにしたパリの都市改造がおこり、鉄筋建築や鉄道の出現で街の様相は大きく変化し、カフェができ、音楽会もさかんに催され、市民の多くはその娯楽を享受するようになります。フランスは、この19世紀の中頃をもって、近世から近代へと、突入したのです。



<印象派に影響を与えたもの>

印象派と呼ばれる画家たちは、新しい絵画のありようを模索した人々です。今までとは違った何かをつかむために、彼らは積極的に新しいものに触れてゆきました。写真の技術しかり、外国の絵画もしかり、外国や、新しい社交場などの娯楽場もまたしかりです。その中でも、日本人として注目したいのは、彼らに与えた浮世絵の影響です。ペリー提督の来航によって、長い鎖国時代を終えた日本から、様々なものが諸外国へ流出しました。その中に、北斎や歌麿・広重といった、浮世絵もあったのです。浮世絵は、日本独特の、他に類を見ない絵画であり、その主題の斬新さのみでなく、大胆な構図や鮮やかな色彩、作画の方法までもが、強い驚きと関心を持って迎えられ、かつ研究されました。マネやドガをはじめ、ルノアール・モネ・セザンヌ・ピサロらを筆頭に、ほぼすべてともいえる印象派の画家たちに、少なくない影響を与えたのです。



<印象派の革新>

美術史上における

印象派の革新は、大きくいうと3つの点に集約されます。

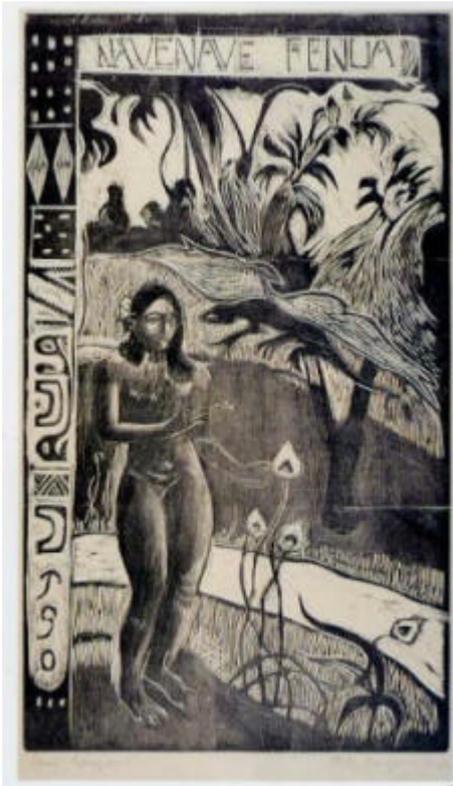
1つ目は、技法です。純粋色、すなわち原色の多様や、筆触分割といわれるタッチが、最も典型的な印象派の特徴です。光と影の対比を重視したこれらの技法は、今までの絵画とは一線を画し、明るく華やかな印象を与えましたが、反面、輪郭があいまいになり、全体として、ぼんやりとした感じになっていきました。

2つ目は、主題の変化です。それまでのサロンによる絵画のヒエラルキーは、歴史画や神話画を頂点としており、風景画や風俗画は、下位にありました。しかし、印象派の画家たちは、積極的に身近な外界に目を向け、鉄道や工場、都市生活を楽しむ場所や市民の生活をモチーフとして取り上げ、また、都市や郊外の風景を好んで描きました。

<印象派の誕生>

1874年、毎年恒例の公式のサロンとは別に、規模の小さな、審査員すらいらない展覧会が、パリで開催されました。これが、「共同出資会社」による展覧会で、現在でいうところの「第一回印象派展」です。中心となったのは、'オーギュスト・ルノアール'・'エドガー・ドガ'・'クロード・モネ'・'ジョージ・ピサロ'・'アルフレッド・シスレー'・'ポール・セザンヌ'・'ベルト・モリゾ'・'アルマン・ギヨマン'といった、現在では巨匠といわれる、新進の画家たちですが、当時、まだほとんどの人にとっては、彼らの芸術は、理解からも賞賛からも遠いところにあったにもかかわらず、彼らは、その感性の信じるままに、大きな一歩を踏み出したのです。それは、落選を繰り返していたサロンからの、完全な決別でもありました。しかし、彼らの第一歩は、サロンの掲げる、絵画の認識から大きく外れていたため、徹底的な酷評を受けました。

私達は、普通に「印象派」という言葉を使ってい



ますが、この言葉は、この1874年の展覧会において、始めて登場します。批評家の一人であるルイ・ルロワが、揶揄をこめて書いた書いた記事の「印象主義者たちの展覧会」という言葉がそれであり、これは、その展覧会に出展されていたモネの《印象、日の出》の題名からとられています。そして、1977年の第3回目の展覧会において、彼らは自ら「印象派の展覧会」と呼ぶようになり、それが現在まで

続いています。

印象派は誰をもって始まるのか、これは、とても難しいことです。どの様なものであれ、過去からまったく断絶した革新は、ありえないことであり、変化の兆しから決定的な変化までの間の揺籃期は、ひどくあいまいなものでもあるからです。

フランスの美術界において、この揺籃期における橋渡しをしたのが、カミーユ・コローです。彼の作品には、印象派の先駆者らしき側面が多くみられます。しかし、コローは、印象派の革新的な若い画家たちとは、決定的な部分での意志の隔絶があり、彼らから多くの尊敬や信頼を受けながらも、彼らに賛同できず、そういった意味では、コローを印象派として捕らえることは、やはり多少の無理があるといわなくてはならない気がします。

その後、印象派の旗手として出てきたのが、『エドゥアール・マネ』です。彼は、サロンにおいて1863年の《草上の食事》で、続いて1865年の《オランピア》でも、ス



キャンダルを引き起こしました。これにより、マネは、一躍印象派の画家のリーダーとなるのです。しかし、マネは、保守的な感覚もあり、サロンから決別した彼らの展覧会に作品を出展することはなく、生涯サロンに出展を続けました。

マネに続く印象派の画家たちは、早い段階で、サロンに見切りをつけました。実際、1880年には、サロンは終幕を迎えます。それから、印象派は黄金期を迎え、私達にも馴染み深い数々の傑作が、次々と作成されてゆきます。ルノアールの少女達、ドガの踊子、モネの晩年の大作《睡蓮》などがそうです。



今回の展示に取り上げた印象派ですが、私達の展示の期間中、ブリジストン美術館において、『ルノアール展』が開催されています。印象派の代名詞ともいえる彼の作品は、冒頭でも述べたとおり、多くのファンをもっています。彼の作品にふれることで、印象派といわれた人々が、何を目指し、表現しようとしたのか、良く分かると思います。もちろん、今回取り上げた画家たちひとり一人が、違った魅力を持ち、決して誰のまねでもない自分の絵をもっていますが、それでも、彼らには多くの共通点があります。ルノアールの絵には、その共通点が、とても良く分かる形で現れているのです。そして、もう一度、彼らの絵を、見比べて見て下さい。そこには、おどろくほど多くのことが、その親しみやすさの裏側で、発見されるのを待っています。もっとも、それほど肩ひじ張らず、春の陽射しを感じさせてくれる柔らかく暖かな彼らの絵を、そのまま楽しんで頂けるだけで、十分です。どうぞ、19世紀に花開いた絵画の世界に、心を遊ばせて見て下さい。

(文責:川上亜衣子)



TEL & FAX 03-3275-2691
営業時間 平日 10:00~20:00
土日祝 11:00~19:00



TEL & FAX 03-3272-2888
営業時間 10:00~20:00

〒1040028 東京都中央区八重洲2-1 八重洲地下街
年中無休(元旦のみお休みさせていただきます)

ご意見ご感想ご提案をお待ち申し上げます。
下記宛にお寄せ下さい。

金井書店営業本部
〒161-0032 東京都新宿区中落合421-16
FAX 03-3953-7851
E-mail: office@koshocojp

読み終えた本、昔の本をお売り下さい